

造形的な学びの心づもり

1 研究の内容

これまで、図画工作部では、身体性を発揮した「もの・場所・こと・ひと」との対話を通して、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養うことによって自分の生活を創っていく子どもの育成を目指してきた。昨年は、「造形的な学びの心づもり」という部のテーマで学びをひらく子どもの学びの姿をみてきた。今年度本校は「てつがく」科創設に向けて新たな研究のスタートをきり、授業研究を重ねてきた。授業研究では円座になり身近な生活の中の自明と思われる価値やことに対する問いについて対話する活動を行ってきた。そこでは伝達手段として話し言葉を中心とした「文字や記号」が飛び交っているが、本部会としては、かくこと、つくること、空間や場に関わること等の造形表現も「子どもの言語」として捉えている。言語・非言語と対立させることなく、多種多様な言語をもつ子どもたちが、身体全体で世界と出会う「てつがく」する姿をみとっていく。「てつがく」することと図画工作の関係を考える時、子どもを「まっさらな」「不完全な」という捉えではなく、「子どもはもう既に『てつがく』している」という心づもりで子どもに向きあいたい。図画工作は、表現及び鑑賞の活動を通して、共感・批判・賞賛・提案を繰り返しながら、造形的な思考力や判断力を培い、美しいと感じる心や美に向き合う身体性を涵養していく教科の特性がある。形や色に基づいてイメージを感受する感性で世界をみていく身体性は、図画工作の「てつがくすること」の基盤となると考えている。

今年度は、その手がかりとして「鑑賞」の活動で見られる子どもの気づきや問いに注目してきた。子どもは活動の中で、対象から視覚的なイメージを受け取り、そのイメージを基に、他者とともに相互対話を繰り返す。対話を繰り返しながら、造形的な美に向き合う中で、自分がそれまでの経験を基にみていた対象が変容し、自分の考えが更新され、新たな問いが生まれ、自分の主題を探究しながら表現する。こうした「鑑賞」の活動でみえる一連の流れは、物事の本質や真にせまっていく姿勢を養うことになるのではないだろうか。また造形的な「美」に向き合うとき、対極にある「醜さ」についての感度も同時に高まるが、そうした物事の二面性に触れ、子どもたちの対話や探究が常に更新されながら広がっていくことにより、個々の文化が共存する空間が創られることを期待している。そうした図画工作における姿を鑑賞の視点で、3からの実践事例に挙げた。個々の文化が共存する空間では、それぞれがもちよる価値によって、物事の二面性だけではなく、より多くの価値を発見することになる。それは、子どもたちが「物事の多値性」を捉えながら、より心身のあらゆる感覚を働かせ、真を問い続けることを楽しむ姿勢につながっていくと考える。その時、異質なものを価値や文化として受け入れることのできる「寛容性」が問われるが、同質の寛容性には陥らないように、できるだけ外の文化を教室に持ち込み、今までみていた世界が一変したり、見方が変わったりしながら、多値を見出せる題材を考えたい。

(1) 教師の心づもり

①美を探究する子どもに対しての、教師の居方

これまでに、「心づもり」として、子どもの生活を取り巻く様々な世界と出会う為の時間や行為の保証を事を考えてきた。一番重要な事は、子どもの文脈を無視した教師の声かけをやめることである。とても簡単な事だと捉えられがちだが、教師は意外と待てない。図画工作に限らず、子どもが何かを創造する際に、すぐにアドバイスをし、自分のアドバイスのおかげで子どもの作品が「良く」なったように思いがちである。教師はいつもこの危うさを感じる事ができる身体をもちたい。また、その「良く」がその子のイメージの延長線上にあるかのごとく大人の文脈に引きずり込み、辻褄を合わせるものであってはならない。そういうと、よく「放任でいいのか？何でもいいのか？」と言われるのだが、日頃からその子の造形表現の文脈や背景を感じながら、みていないように聴き、その子の表現に触っているのである。子どもは身体的、感覚的にとても敏感であり、大人の存在をどれだけ感じているのかという事に、

もっと配慮をしなければならない。時には、教師自身の存在はできるだけ無に近づけながら、その子の身体の内に入り込み、あらゆる知覚を働かせてその子の声を聴きたい。

②子どもの様々な言語をみとること

図画工作では、例えばこれまでに行われてきた相互対話の、活発な意見交換をしているようにみえることのみを捉えて「てつがく」しているというのではなく、1に挙げたように、造形活動の中における、ものや場、人を媒体にしながら世界と出会い、多様な価値観をもつ個人の発見や探究する姿、他者との対話後の再考の姿など、個人内における自己内対話も含める。上記1にも挙げたように、かくこと、つくること、空間や場に関わること等の造形表現も子どもの言語として捉えており、多種多様な言語や価値をもつ子どもたちが、身体全体で世界と出会う「てつがく」する姿をみとりたい。

●2015.5.14 2学年 「にじむ」「はじく」を体感する活動 (1・2/4時間)

2年生では、えのぐをつかった技法を教えるのではなく、自分自身で様々な効果や表現を発見してほしいと考えた。えのぐをこじませたりはじかせたりすることは、えのぐ遊びとしてよく行われる活動である。しかし、一つの決まった表現方法の枠内で「教師が遊ばせている」事が多く、皆同じ表現で終わってしまう事が多かった。ここでは、教師はあくまでも一例だけを見せ、子どもがえのぐで遊ぶ時間を保障し、教師が提示した枠内に留まらず、新たな発見や探究する姿を期待した。図1の子どもは、活動の中でふっと立ち留まり、自己内対話をし、また新たな価値を見出していた。図2の子どもは、手がとまる事によって対象と対話し、深く思考しているようにみえた。図3の子どもは、教師が実演したように色を塗っていくのではなく、筆を抵抗感無く動かせるような、ちょうどいい水の分量を体で感じ取り、筆と自分の手を一体にして「線」をかくことで「はじく」を楽しんでいた。



図1 しばらくながめる
ふっと立ち留まり、思考する姿を大切にしたい。



図2 紙を傾け、えのぐが垂れるのをじっとみつめる
教師がこの子は何を考えているのだらうと、視線や体の動きからその子になって考えてみる。そのゆったりとした時間を待たないと、教師の思いに引きずり込むことになる。子どもが夢中になって他者と出会う時間を大切にしたい。



図3 「線で」はじくを体感する
教師が与えた既存の枠を飛び越えて活動する子ども、個々の発見により多様な価値が教室に溢れていく。そういった子どもたちをみとる教師の寛容性が問われる。

図画工作では、教師が設定した一つの活動のねらいから「外れているようにみえる」事は大いに評価していききたい。上記に挙げた子どもたち意外にも、「はじく」の活動から、『「はじかない」を発見した!』と嬉しそうに語る子もいた。その姿からも分かるように、ねらいから外れるのではなく、より活動が拡散していき、子どもが自律的に多様な価値を探っているのだと考える。そのような子どもの考えや表現が更新されても、「そういうあなたでいいんだよ。」と柔軟に受け止めてくれる寛容な存在として教師が居る事、そういった異質なものを排除しない空間につながる、寛容な空間を子どもと共につくる事が、「てつがく」することを支え、学びをひらく事につながるのだと考える。

2 今後に向けて

今年度は、美を探究する姿を「てつがく」している子どもの姿としてみとり、鑑賞の授業で、探究・対話の場面を活動の中に取り入れて来た。3で挙げた鑑賞の授業では対話の姿が見えやすいが、その場面に特化する事で「表現」が切り離されてしまったとふり返る。今後は表現と鑑賞が一体となり、物事の多値性を捉える力や寛容性を育む事を目指し、美を探究する姿から、図画工作における「てつがく」することを抽出し、発達段階における題材や評価の在り方を考えていきたい。また、子どものふりかえりや子ども同士の瞬間的なふりかえりを積み重ね、個々の異質な表現の共振がどのように行われるかを探っていきたい。そして、自己に向き合い思考している子どもの声を聴くための手段の一つとして、個々のふりかえりの持続可能な方法を探っていきたい。

3 授業実践からみた子どもの姿

(1) 3年「くぎうち トントン」――生分のくぎをうとう！――（造形遊び）

①「学びをひらく」場の設定

子どもはくぎ打ちが好きである。人間の根源的な表現欲求に働きかけるアフォーダンスと関係があるのではないかと経験則からとらえている。くぎ打ちの行為に浸ることは、本題材のねらいの一つである。本校は3年生まで、教室で図画工作の授業を行うので、騒音に配慮し、プレイバランダと呼ばれる屋外で活動する。「学びをひらく」には、自分の間口を広げ、他者を受け入れるという意味がある。他者と共に、騒音を気にせず、自分が安心してくぎ打ちに没頭できる場の設定は、自明なことながら重要である。また、屋外は天候に左右されるが、太陽の光や風を感じながら活動することで、屋内とは違う新鮮さや開放感を体感できる。造形活動では、場の設定が子どもの活動を活性化させるための重要な条件である。



②「木・くぎ（鉄材）・金づち（道具）」との対話

くぎ打ちの抵抗感を体感するための厚みを考慮し、垂木（3 cm × 4 cm × 25 cm）を使用した。また、垂木の長さは、経験則ではあるが、発想の展開に影響する。短すぎると、安定性や安全性の担保が難しくなるだけでなく、くぎ打ちに没頭する前に見立てが始まり、見立てた主題を再現する活動に収斂する傾向が見られる。金づち（道具）を使って、くぎ（鉄材）を木に打つ単純な行為の中で振動や反動、音を体感することは、造形活動における対話であるにとらえている。行為を通してイメージをとらえることは、大切な造形的な学びである。



③ 造形的対話から立ち上がる主題

本題材は、くぎ打ちという行為に浸る「造形遊び」を基盤としているが、材料の特性から「立体」へ収斂する傾向が見られることは、「造形的な学びの心づもり」として想定済みである。ただ、その展開の過程で「鑑賞」の能力が関与し、主題をとらえる造形的思考の中に、図画工作における「てつがくすること」を考える糸口があるのではないかと考えている。その象徴的な活動例を紹介する。



キーホルダーかけ くぎを全て打ち込まないところに、作者の感覚的な意図が伝わる。「木の色がよかったので、色を使わずにシンプルにした」とコメント。くぎの形状機能に着目して、機能的価値を新たに生成した活動である。つかんだ発想は「てつがく」している。

日本 釘を集中させた形を日本列島に見立てている。始めから日本列島を再現しようとしたら、この集中力は維持できたのだろうか。右側のまばらな釘は「沖縄」だと言う。授業で学習していない情報を造形的感覚で処理する発想こそ社会構成主義的な造形的学びと言えないだろうか。

未来のペット 動物への見立ては、3年生らしい発想。「動物と昆虫が合体」の主題は、木の長さも反映して、一種類の生物に収束しなかったと授業者は読み取った。

(2) 5年「見つめ直そう 身の回りのこと」――アルミ材で表そう――（立体）

①「A表現」と「てつがくすること」

「A表現（立体）」と「てつがくすること」の関連を意識して本題材を捉えなおしてみた。「てつがくすること」は、自明な価値やことがらを問い直し、新たな意味生成をすることが概要である。これを「表現」領域の活動に重ね合わせると、主題を捉えることを思い浮かべた。一般に主題設定を表活動の始動に位置づけると、「何を表すか思い浮かばない」と辛い活動となるのが常である。子どもの表現活動は、<もの・場所・人・こと>との対話を通して主題を捉えることに造形的な学びの重心を置きたいと本部会は考えている。そこで、アルミ材（アルミホイル、アルミ線）の特性（可塑性や感触、色など）との対話を媒介にして発想展開を促す題材として捉え直してみたが、本校の子どもたちが捉えている「身の回りのこと」の実相が浮かびあがった。次項では、授業者が「てつがく」した例を紹介する。

②子どもたちのとらえた身の回りのこと（主題）



夢の世界-東京タワーに登ったよー 江戸川乱歩を読んだ夜の夢だそうである。読書好きが多い本校の子どものらしいさがある。土台の近くに、「アルミ線をくるくる雲状にして、夢のイメージを表した」とのこと。材料の特性を生かした「創造的な技能」を發揮している。



通学の中の電車 交通機関を利用して通学する児童が多い本校特有の主題である。毎日見ている情景だからこそ、自分なりにイメージを捉えて、実感をもって表現できるのであろう。



朝5時に食事をしている私 「朝5時、私が机に向かって食事をしている。でも今日は、テストなので緊張している。」コメントを読むと作者の切実な日常の実感が伝わる。造形的軌跡を読み取るだけでは、主題の真意を捉えきれない活動例である。

(3) 6年「アートレポーターになって、ギャラリートークを楽しもう」(鑑賞)

— 「B鑑賞」と「てつがく」—

「てつがくすること」と最も親和性がある図画工作の活動は「B鑑賞」の領域であると直観的に閃き、校内研究で公開した題材である。馴染みのある美術作品との対話を通して、グループ内で協働的に新たな意味や価値を生成する「対話による鑑賞法」の学びを目指した。「てつがくすること」も鑑賞活動も、発話力や思考力を技能的に高めることだけが目的ではない。「学びをひらく」ことによって主体的に世界と向き合う身体性の基盤を培うことを本研究では目指している。本項では、アートレポートの資料としてグループごとにまとめた学習カード例を紹介する。実線の囲みはグループの作品解釈、点線の囲みは、その根拠となった気づきや発見を書き起こして示してある。なお本時の詳細は、本校小誌「児童教育 26」を参照されたい。

パリの風景が、シャガールさんに希望を持たせたから、天から光が差し込んでいる表現と多彩な色を使っている。

カラフルな窓を開け、外を見ている。

落ちていた人がこちらを見ている。

くもっている空に光が差し込んでいる。

青→表の顔
白→裏の顔

青→表の顔 目をさしている。
白→裏の顔 えりが青い方にむいている。人の手にハートがある。

落ちていた人がこちらを見ている。

このカラフルなまともな外を見ている。

落ちていた人がこちらを見ている。

くもっている空に光が差し込んでいる。

ネコが落ちている人の方を見ている。ネコが何か考えている。

ネコの顔は、苦しい時のシャガールであり、この風景を見て乗り越えた。

手を差し伸べている。襟が青い方にむいている。人の手にハートがある。

CHAGALL と書いてある (サイン)

ネコが落ちている人の方を見ている。ネコが何か考えている。

パリ風景がシャガールさんに希望を持たせたから、天から光が差し込んでいる表現と、多彩な色を使っている。

山

落ちていた人がこちらを見ている。

くもっている空に光が差し込んでいる。

青→表の顔 目をさしている。
白→裏の顔 えりが青い方にむいている。人の手にハートがある。

ネコが落ちている人の方を見ている。ネコが何か考えている。

ネコの顔は、苦しい時のシャガールであり、この風景を見て乗り越えた。

手を差し伸べている。襟が青い方にむいている。人の手にハートがある。

CHAGALL と書いてある (サイン)

落ちていた人がこちらを見ている。

くもっている空に光が差し込んでいる。

青→表の顔 目をさしている。
白→裏の顔 えりが青い方にむいている。人の手にハートがある。

ネコが落ちている人の方を見ている。ネコが何か考えている。

ネコの顔は、苦しい時のシャガールであり、この風景を見て乗り越えた。

手を差し伸べている。襟が青い方にむいている。人の手にハートがある。

CHAGALL と書いてある (サイン)

(小沼、堀井)